

折々の言葉 その2 (梅津寿一編)

* はこどり考・源氏物語「若菜上」 p300

深山木に ねぐらさだむる はこ鳥も
いかでか花の 色にあくべき

夕霧の歌

深山木=紫の上

はこ鳥=源氏の君

花=女三宮

(深い山の木にねぐらを定めているハコ鳥もどうして花の色にあきたりしよう)

類歌： 深山木に 夜は来てなく はこ鳥の
あけば帰らん ことをこそ思へ

古今六条六、藤六集

* 橘曙覧 (たちばなのあけみ) (1812-1868)

「志濃夫廼舎歌集 (しのぶのやかしゅう)」の独楽吟に「たのしみは」ではじまる歌・・・

- ・たのしみは 珍しき書 人にかり
始めひとひら ひろげたる時
- ・たのしみは 妻子むつまじく うちつどい
頭ならべて 物をくふ時
- ・たのしみは まれに魚煮て 児等皆が
うましうましと いひて食ふ時
- ・たのしみは そぞろ読みゆく 書の中に
我とひとしき 人を見し時
- ・たのしみは 銭無くなりて わびをるに
人の来りて 銭くれし時

* ざれうた

- ・老妻の叱咤の声にて年明けぬ
一家というはかくて保つか
- ・口小言うるさく妻は老いにけり
どこ吹く風と我も老いにき

- ・女房をちょっと見直す松の内
- ・元日やおのが女房にちょっと惚れ
- ・女房に惚れると先が近くなり

- ・逢うてわかれて わかれて逢うて

末は野の風 秋の風

一期一会の わかれかな

小唄

* 去年今年 (こそことし)

去年今年 貫く棒の ごときもの

高浜虚子

路地裏も あはれ満月 去年今年

三橋鷹女

去年今年 袂に残る 紙の銭

石橋秀野

月光に 山野凍れり 去年今年

相馬遷子

* 枕草子 46段

「女はをのれをよろこぶ物のために顔づくりす。

士はをのれを知る物のために死ぬ」となんいひたる。

出典： 史記・刺客列伝「士為知己者死、女為説己者容」

(2018.12.08) 梅津寿一記

追記： 「誠信の交わり」

互いに欺かず 争わず

真実の心を以て交わる

雨森芳洲 (交隣提醒)